

アメリカの60年代と文化戦争*

安河内 英 光

はじめに

アメリカにおける文化戦争はレーガン政権下の1980年代に強くなり90年代にそのピークを迎え、おおよその方向性は多文化主義に傾いているようであるが、19世紀の「坩堝」論まで遡及しなくても、ダイアン・ラヴィッチ、アラン・ブルーム、アーサー・シュレジンガーのようなアメリカとアメリカ人の共通のよりどころ、つまりアメリカのアイデンティティとして独立宣言の内容や合衆国憲法の理念を遵守するべきだという保守派の主張がある一方で、アメリカの共通の理念はない、あるとすればそれはヨーロッパ系白人のアメリカ人の帝国主義的、覇権主義的理念であるという多文化主義者やL.A.ホスキンスやM.K.アサンテなどのアフリカ中心主義者の主張もあり、文化戦争の実態は混迷を深めている。この論文は、現在におけるアメリカの文化戦争の内容を把握し、そのあるべき方向を探るものであるが、アメリカの文化戦争は、アメリカないしはアメリカ人とは何かという非常に根源的で本質的な問題を問うものであることは言うまでもない。

1) 60年代のアメリカ

アメリカは移民によってできた多民族国家であるがゆえに、アメリカやアメリカ人とはなにかという問いや、アメリカの政治や経済のシステム、さらには文化の内容についての議論は17世紀の植民地時代から常にあったのであるが、近年の文化戦争といわれるものの始まりは1960年代にあるというのが定説になっている。

60年代のアメリカは、反核運動、ベトナム反戦運動、公民権運動、大学紛

争、フェミニズム運動等により、南北戦争以来、国家と社会が最も喧騒と動乱を極めた時代であったが、運動に参加した学生を中心とする一般民衆はアメリカの国家や社会のシステムのあり方を根底から疑いその変革を求めた時代であった。核による地球と人類の破滅の危機が叫ばれ、共産主義の侵攻から自由主義体制を守るという大義名分によってベトナム戦争に全面的に介入していき膨大な戦費と人員が投入され、おびただしい数のベトナム兵やベトナム民衆とアメリカ兵が戦争の犠牲者になる。さらに、アメリカ国内ではアメリカ南部を中心に始まった反人種差別運動が公民権運動へと盛り上がり、M.L.キング牧師のワシントン大行進でクライマックスに達するが、この60年代は国家的指導者—— J.F.ケネディ大統領、キング牧師、マルコム X、R.ケネディ上院議員 —— が次々に暗殺されていった時代でもあった。これらのアメリカの状況に対する学生や一般民衆の反体制運動は「表面的ないしは現象面では、アメリカの軍事的、政治的、社会的体制の変革を求める運動だったが、それだけに留まらずに、そういう国家や社会の体制の理念的基盤を作ってきた西洋近代の啓蒙思想の理性とロゴス中心主義と、それらの具体的表れである科学的、合理的思考方法と、アメリカ建国の理念に具現されている民主主義と自由主義の実態が徹底的な疑念と批判の対象となったことである」(安河内3)。このアメリカの反体制運動は、ヨーロッパや日本にも飛び火して広がり1968年にそのピークを迎える世界的な反体制運動となった。

G.アリギ、T.K.ホプキンス、I.ウォーラースティンは、「世界革命は、これまでに二度あっただけである。一度は1848年に起こっている。二度目は1968年である。両方とも歴史的失敗に終わった。両方とも世界を変化させた(There have only been two world revolutions... Both transformed the world.)」(Arrighi, Hopkins, Wallerstein 97) と言って、68年の世界的反体制運動を高く評価し「世界革命」として位置づけている。

1848年の革命は、イギリスにおいて産業革命が1830年代に終了しその経済の産業資本主義体制に即して起こった政治的、社会的革命で、それが広く西洋世界に波及していったものであるが、(河野1-12)、ウォーラースティンは68年の革命を次のように説明する。1945-67年の時期は世界システムにおけるア

アメリカ覇権の時代であり、その基盤となったのは、第二次世界大戦の結果アメリカがあらゆる分野で築いた生産効率であり、この経済的優位を世界規模の政治、文化の支配に転化させた。それらは具体的には、ソ連との様式的な冷戦構造を作り出しアメリカ的イデオロギーの優位性を主張すること、アジア、アフリカの非植民地化を漸進的に進めながらそれらの地域を政治的、経済的に支配すること、また、国内では階層対立や人種対立の顕在化を抑える方向の政策を実施する、等の諸政策によってアメリカが世界を政治的、経済的、軍事的に支配することが50年代は順調に、また、円滑に機能した。しかし、60年代初期にベトナム戦争介入時からアメリカのヘゲモニーがほころび始め、そして、それが上記の各種の反体制運動によって革命と言えるものになった。68年革命は世界におけるアメリカのヘゲモニーに対する抵抗運動である (...in which opposition to US hegemony, in all its multiple expressions, would explode in 1968...)。(Wallerstein 66-68)

つまり、啓蒙主義の理性とロゴス中心主義と科学的合理的思考、政治体制としての民主主義、経済体制の資本主義、等の西洋の近代を形成する諸理念が合体して大国アメリカの政治、経済、軍事の巨大な制度として実現し、それらがアメリカの国内統治と世界支配に巨大な力を行使することに対する根源的な疑念と批判が60年代のアメリカ国内での体制変革と世界での革命の実態であったと言える。さらに、リュック・フェリー／アラン・ルノーは、フーコー、デリダ、ラカン、ドゥルーズ、アルチュセール等のフランス哲学者たちが、「近代哲学の人間主義は、一見、解放者であり人間の尊厳の擁護者に見えるが、実はその反対者に転化してしまったのであり、圧制を決定し、またその原因になったのである」と主張したと言い、「68年のフランス哲学の場合は、はっきりと反人間主義を選択したということである」と言う。(フェリー／ルノー 7-9)

つまり、近代の人間主義は対象を利用価値によって決定し、人間がすべての関係の中心なのであり、この理性を中心に成立した近代社会のシステムは、表面的には反封建制の自由と平等を掲げながら、実際には、男女の性差別や人種、民族の差別、支配という権力的暴力を内包しているシステムであり、いわゆるフーコーの理性と権力の「共犯関係」があるのであり、この意味での近代の人

間中心主義批判が68年の思想の中心だとフェリー／ルノーは言うのだ。15世紀から17世紀に渡る大航海時代とその後なされる植民地形成時代はヨーロッパ諸国の近代精神の形成期に当たり、理性と科学の啓蒙精神がヨーロッパ人中心の人種と民族の差別と弾圧のシステムを生み出したことは確かであろう。アメリカの60年代はこの近代のヨーロッパの精神とシステムが根本的に批判と検証の対象になるのであり、80年代と90年代に激しくなるアメリカの文化戦争の基本的な問題点の提示はこの60年代になされたことは明白である。

60年代の反核運動、ベトナム反戦運動、公民権運動、フェミニズム運動、大学紛争等のうち80年代と90年代の文化戦争に密接に繋がっているのは、第一は公民権運動であり第二は大学紛争であろう。60年代は差別と弾圧の下に置かれた非白人が本格的に人間として自己主張を始めた時代だと言える。フレドリック・ジェイムソンは、60年代の始まりをイギリス領及びフランス領のアフリカが、つまり第三世界が、植民地支配から脱却することに見ている。たとえば、ガーナの独立は1957年、コンゴの独立は1960年、アルジェリアの独立は1962年だが、このような世界史的な政治的大運動が与えた影響をジェイムソンはこう言う。

60年代とはこれらの「原住民」が、内部的にも外部的にも、すべて人間となった時代だと言える。つまり、第一世界の外部に存在する主体、すなわち、いわゆる「原住民」ばかりでなく、第一世界の内部において植民地化されている人々——すなわち、「少数民族」、辺境居住者、女性——も等しく人間となったのが60年代なのだ。(Jameson 181)

植民地主義が世界に及ぼした規模の絶大さは、「いま世界に生きている人々の四分の三以上の生活は、過去の植民地主義体験によって形作られたものである」(アシュクロフト／グリフィス／ティフィン 11)という指摘によって分かるが、その影響に関して言えば、政治的、経済的な側面だけではなく社会的、文化的、精神的なものを考えれば、原住民に対する植民地主義の影響の途轍もなさは想像を絶する。上の引用文でジェイムソンは、第三世界の人々の植民

地からの解放と第一世界の内部において植民地化されている人たち、すなわち、差別と弾圧を受けている人たちが、が等しく人間となったのが60年代だと言うが、ジェイムソンが言う「人間」とは、隷属状況から解放されて認識上「人間」という概念が与えられたのであって、社会的、政治的に差別や弾圧がなくなったというわけではなく、また、これらの人々の文化的、精神的な状況が60年代に人間らしくなったというわけではないだろう。

ポストコロニアル文献の必読書であるフランツ・ファノンの『地に呪われたる者』の序文でサルトルは、「最近まで地上に住む20億の人々は、5億の人間と15億の原住民からなっていた。前者は「言葉」を自由に駆使し、後者はそれを借りていた」と書いている。ここには、言語が支配と弾圧の道具であり、そして、人間が人間であるための証である言葉を奪われた15億の原住民がいかに人間以下の状況に陥れられたかをサルトルは適切に表現している。ファノンは述べる。

植民地主義は非統治国の現在と未来に自己の掟を押し付けるだけでは満足しないのだ。植民地主義は、その鉄鎖で民衆を締め付け原住民の頭脳からいっさいの形態、いっさいの内容を取り去ることで満足するものでもない。一種の論理の逸脱、退廃によって、植民地主義は、非抑圧民族の過去へと向かい、それをねじ曲げ、歪め、これを絶滅するのだ。(ファノン 203)

ここでファノンは、植民地主義はそれが持つ掟やルールやシステムを非抑圧民族に押し付けて政治的、経済的に支配と弾圧を実施するだけでなく、身勝手に強引な論理で原住民の歴史と文化と人間らしさのいっさいを壊滅状態に追い込む残酷極まる所業を述べる。植民地主義は第三世界を帝国主義的隷属の下に置く大義名分として、封建制や王制の下に置かれ、かつ、精神的迷妄な状態にある住民を解放し啓蒙するという大きな虚構の物語を作り上げそれを現実化するために政治的、経済的、軍事的力を行使する。サイドは、この西洋植民地主義の身勝手な自己中心的正当化を以下のように述べる。

世界の重要な運動と生活のすべては西洋にあり、西洋の代表者たちが、おのが幻想と博愛主義を、精神の枯渇した第三世界に勝手きままに押し付けているのだ。こうした観点によれば、世界の周辺地域では、いかなれば、いかなる歴史も、いかなる文化も存在しないのであり、西洋なくしていかなる独立も統一もないことになる。(Said xix)

このようにしてなされた西洋の植民地主義への隷属に対して第三世界が立ち上がり、それを打破して独立を勝ち取っていったのが60年代だが、アメリカにおいて60年代に始まり、80年代に激しくなる文化戦争には、60年代の世界的規模の人種と民族の解放運動に連動した動きがあったのである。植民地主義には西洋近代を作った啓蒙主義、民主主義的政治体制、自由主義的経済体制、等が密接に結びついているので、西洋近代精神にはその裏面に暴力性や残虐性を持っているのであり、したがって、その政治的、経済的、文化的側面のみならず、理性や主体を中心とする人間中心主義という西洋の人間観が根源的な疑念と批判の対象となったのである。

60年代の民族解放闘争の影響を受けた、ないしは、それと連動した反体制運動の一つに「エスニック・リバイバル」現象がある。これは1950年代半ば以来アメリカ南部の黒人を中心に展開された社会的、経済的差別に反対し黒人の地位向上を訴える、一般に、公民権運動と呼ばれるもので、「公民権法」(1964)や「投票権法」(1965)「積極的差別是正措置 (Affirmative Action)」(1964)などを勝ち取った。しかし、社会の現実においては、黒人に対する差別的状況はなかなか正されず、以前とあまり変わらないことを踏まえて、黒人のグループによっては、キング牧師が提唱した非暴力主義運動に飽き足らずに、北部の大都市で人種暴動という行動に出たり、また、マルコム・Xが提唱した「ブラック・ナショナリズム」によって、黒人のアイデンティティと尊厳の回復を求めて、アフロ・ヘアーやアフリカの民族衣装を身に着けたり、黒人の呼称も「アフリカ系アメリカ人」を使用するようになった。そして、大学では、学生のカリキュラムの見直しの要求によって、“Black Studies”, “Racial Studies”, などの「エスニック・スタディーズ」という講座が新設され、「少

数民族研究学科」(Minority Studies Department)——その代表的なものがアフロ・アメリカン・スタディーズ——が多くの大学で設置された。さらに、60年代後半から“Women Studies”が設置され、最近盛んな「ジェンダー」研究がこのときに開始され、伝統的な家族関係や家父長中心主義を批判的に検証する教育と研究がなされた。それと同時に、いわゆるそれまで古典と言われていた作品が、キャンノンとして文化的ヘゲモニーを持ち西洋的価値観や思考方法を学生に植え付け、それがマイノリティに対する抑圧や差別の道具となっているという批判の対象となり、必修科目からはずされるというケースも出てきたし、それに代わってマイノリティを取り扱った作品が取り上げられるようになった。そして、このようなマイノリティに対する差別を緩和する方向で1965年に移民法が改正されて「それまでヨーロッパ人に好意的で他の地域からの申請者には厳しかった政策を転換し、第三世界からの移民が容易になった。」(Time July 8, 1991) H.L.ゲイツ Jr.は「現在の多文化主義運動の高等教育機関における起源は1960年代後半のアフロ・アメリカン・スタディーズの誕生に辿れる」(Gates, Jr. xii)と言う。

だが、60年代に激しかった人種と性差に対する体制改革運動は70年代に入ると沈静化する。その理由として大きいのはベトナム戦争の終結であり、アメリカは膨大な戦費とマン・パワーが導入されたベトナム戦争によって経済的に疲弊し71年には19世紀末以来の貿易赤字を出す。さらに、73年の石油危機(第一次オイルショック)によってアメリカの世界におけるプレゼンスは大いに低下する。(Gitlin 73) また、ニクソン政権の体制批判の運動に対する規制の強化もあるが、実質的な敗北に終わったベトナム戦争にアメリカ国民は精神的な疲労感を覚え、反体制運動のエネルギーは沈静化する。そして、60年代には沈黙していた保守派の巻き返しが起こり、70年代の半ばを過ぎると、アメリカにおける社会批判の声は、60年代に沈黙していた保守層の波に飲み込まれ、共和党保守政治の基盤となる「モラルマジョリティ」が60年代以降の社会批判のバックラッシュとして現われる。そして、80年代末、大学が保守層による格好の攻撃的的となり、「文化戦争」が本格化するのである。(樋口285)

大学が1980年代の「文化戦争」の標的となった状況には、まずは学生の多様性がある。その原因としては、第二次世界大戦後、軍役義務を果たしたものは誰でも支給される高等教育への奨学金制度(GI ビル)によって、経済的な貧困層のマイノリティに大学教育を受けるチャンスが与えられたこと、また、60年代に成立した「積極的差別是正措置」の中にある、「割り当て制度」により、一定の割合でマイノリティの教員が採用されたり学生の入学が許可されるようになったこと、さらに、前に述べた1965年の移民法の改正によってヨーロッパの白人以外のアジア、アフリカ、オセアニアからの移民が入りやすくなったので非白人の移民が急速に増えて、それまでの白人が過半数を占めた人口統計が変わるほどになったということ、等が考えられる。たとえば、1980年から1990年の間に、ロサンゼルス郡ではそれまでマジョリティであった白人は特にヒスパニック系の移民の増大によってマイノリティに転じたし、2000年にはニューヨークの公立学校の子供の三人に一人はマイノリティであり、10歳以下の子供の四人に一人の親は英語を話せない移民である、という報告がなされている。(Time July 8, 1991. p.11) このような、多様化した学生のニーズに応じるためにカリキュラムを改定しなけりならなくなったのであり、これにより、たとえば、スタンフォード大学では、「西洋文化(Western Culture)」が「文化・思想・価値(Cultures, Ideas and Values)」に科目名が変更され必読文献に非西洋的なものが入れられた、というようなことが起こった。(樋口287)そして、1990年代には大学生対象の歴史教科書の書き換えがなされ、1992年には新大陸発見500周年をめぐる議論が戦わされ、そして、小・中学校における歴史教育のあり方、教科書の書き換え等で「文化戦争」は激しくなる。(遠藤21-23) 歴史をめぐる教育内容の検討は基本的には従来のイギリスを中心とするヨーロッパ中心のアメリカ史やアメリカ文化の中にいかに少数民族の歴史や文化を織り込むかが問題となり議論されたわけだが、この問題が厄介なのは、歴史・文化教育の内容はアメリカの国家形成や理念の内容に関わっており、どのマイノリティのどのような内容を織り込み、小・中・高・大のどの学年にそれを織り込むか、内容をどのレベルにするか、従来のキャンノンの見直しをどうするか、等の多岐にわたる問題があり、これらは容易には解決しが

たい非常に大きな難問である。このような「文化戦争」が起こった主たる原因は、アメリカが移民による多民族国家として成立した抽象的な理念の国家であることにあるので、つぎに、「文化戦争」の根底にあるアメリカの国家理念と文化の関係を見ていく。

2) 文化戦争と理念の国アメリカ

イギリス人の植民地から独立し、多くの人種や民族の移民よりなるアメリカは、抽象的で観念的な理念国家である。移民が始まった17世紀であれ現在の21世紀であれ、アメリカ人は自分もしくは先祖が祖国を離れてアメリカにやってくるまで始めてアメリカ人になるのであり、つねに、自分もしくは先祖にはこのアメリカとは違う世界のどこかに祖国があるのである（とりあえず、ここで議論ではアメリカ先住民は除外しておく）。つまり、大地に根ざした祖先や血族との諸関係や特定の民族的、人種的、宗教的、文化的背景を理念的には分離し切断して、アメリカの国家形成の根幹にある自由、平等、共和制という抽象的な理念を核とする政治的イデオロギーやアメリカ的な象徴や儀式——アメリカの国旗や祝祭日の尊重等——から成り立つアメリカという社会や国家にコミットして行くところにアメリカ人として存在がある。この政治的イデオロギーと国家的象徴や儀式をアメリカに共通する理念や価値または国家的アイデンティティとして評価し尊重し守っていかうとする姿勢は保守派の論者に多い。

通常、一人の人間は特定の風土の中で民族的、人種的、宗教的、文化的背景の中で政治的イデオロギーと係わってゆくが、前者と後者が理念的に分離され切断されているところがアメリカ人の特徴であり、これはアメリカ国家形成の根幹にあるものである。もちろん、広いアメリカには多人種と多民族が住み、それぞれグループは、単独ないしは集団で、アメリカの特定の場所で、民族と人種特有の言語、歴史、習慣、宗教、文化等を持って生活を営んでいることは確かだが、アメリカ人として規定される国民的身分は後者の政治的なものであって、前者は本質的にまた原理的には関係がない。多種多様な人種や民族の移民によって成り立つアメリカは、アメリカ国民の条件として前者を排除して、独立宣言文の“All men are created equal.”（すべての人間は平等に作られてい

る。）という平等の精神でなければ国家形成は行われなかったのである。（この時点での“all men”とはもっぱら白人男性を意味し、アメリカの先住民、黒人および女性が排除されていたことは周知の事実である）。このことは、単純なことだが、重要な内容を含んでいる。民族的、人種的、宗教的、文化的存在としての人間には歴史の累積する時間が個人の中に堆積しそれが内面化され精神化されるものゆえに人間存在の基底の身体性と精神性を伴う部分であるが、それが一個人としての人間がアメリカ人になっていく場合に政治的、社会的には切断され、分離されていくというところにアメリカ独特の特異性がある。

アメリカの国璽には“E Pluribus Unum”（「多から一へ」）という標語が掲げられている。この標語は、通常、多種多様な移民からなるアメリカ人はアメリカ共通の理念や国家的アイデンティティを信じて守っていくことによってアメリカ人として一つになる、ということを表明していると考えられる。国家的統一、つまり、国家の単一性の維持のためには民族の多数性を捨てなければならない、ということを示唆しているし、ここには、19世紀まで強くあり、今でも一部の人には根強く信じられている「坩堝」論が内包されている。つまり、移民は過去の民族性を捨ててアメリカ人になるためにアメリカ共通の理念——それは歴史のプロセスから、結果的にはWASP（White Anglo-Saxon Protestant）のイギリス系やヨーロッパ系の白人の政治理念や文化や習慣によって形成されるのだが——の中に他の民族が同化（assimilate）され統合（integrate）されていくという考えである。

たとえば、「坩堝」論の古典的かつ先駆的資料として有名なフランス人のヘクトール・St.ジャン・ド・クレヴクール『あるアメリカの農夫からの手紙』（1782）でクレヴクールはアメリカ人を次のように述べる。

それでは、この新しい人、アメリカ人とは何なのでしょう。その人はヨーロッパ人でもなければ、ヨーロッパ人の子孫でもありません。ですから、どこの国にも見つけることの出来ない不思議な混血なのです。私はこんな家族を知っていますが、祖父はイングランド人で、その妻はオランダ人、息子はフランス人の女性と結婚し、今いる4人の息子たちは今では4

人ともに国籍の違う妻を娶っています。偏見も生活様式も昔のものはすべて放棄し自分が選び取った新しい生活様式、自分が従う新しい政府、自分が占める新しい地位などから新しいものは受け取っていく、それがアメリカ人なのです。(He is an American, who, leaving behind him all his ancient prejudices and manners, receives new ones from the new mode of life he has embraced, the new government he obeys, and the new rank he holds.) ...ここでは、あらゆる国々から来た個人が解け合いひとつの新しい人種となっているのですから、(Here individuals of all nations are melted into a new race of men,) 彼らの労働と子孫はいつの日にか世界に偉大な変化をもたらすでしょう。(Crevecoeur 43)

クレヴクールはこの文章には、人種の混交と融合、過去の否定、新しい制度や生き方の探求、未来志向等、アメリカ人の特徴が良く表れている。さらに、エマソンも1845年の日記の中でこのように書いている。

この大陸には様々な国から逃れてきた人たちが寄り集まって、アイルランド、ドイツ、スウェーデン、ポーランド、コサックなどのあらゆるヨーロッパの土地ばかりではなく、アフリカ、ポリネシアからやってきた人々までが加わって、それぞれの活力を糾合し、やがてひとつの新しい民族、新しい宗教、新しい国家、新しい文学を作り出し、それは丁度暗黒の中世の溶鉱炉から生まれ出た新しいヨーロッパのような活力に満ちた国家になるであろう。(…a new race, a new religion, a new State, a new literature which will be as vigorous as the new Europe which came out of *the melting pot* of the Dark Ages,...) (Emerson 299-300) (italics mine)

「ここでは、あらゆる国々から来た個人が解け合って(“melted”)ひとつの新しい人種となっている」というクレヴクールのアメリカ人論は18世紀末に出されたもので、「坩堝」論としては最も初期に出されたものだが、また、エマソンが、アメリカで生み出される人種や国家を「暗黒の中世の溶鉱炉から生

まれ出た新しいヨーロッパ」に喩えているのは、19世紀には根強くあった「坩堝」論を典型的に示している。特にこの文章で興味深いことは、エマソンが、ここで“the melting pot”(溶鉱炉、坩堝)という言葉を使っていることであり、「坩堝」論は、イズラエル・ザングウィルが1908年に発表して好評を得た戯曲『メルティング・ポット』(Israel Zangwill, *The Melting Pot*)から出てきているというのが通説となっているが、エマソンはザングウィルよりも約半世紀以上も早くこの言葉を使ったことになる。さらに、エマソンの慧眼と洞察の深さは、「坩堝」に溶け込む人種はクレヴクールにおいてはヨーロッパ人であることが暗示されているし、19世紀では一般的にヨーロッパ系の白人が「坩堝」の中で溶け込んでアメリカ人になると想定されていたのだが、エマソンがここでアフリカ人やポリネシア人という有色人種まで入れた人種の混交を考えていたことである。この点は19世紀から20世紀初頭まで、「坩堝」論で同化や融合が認められるのは、ヨーロッパ系の白人であったのであり、その中でも19世紀後半にポテト飢饉で大量のアイルランド人が移民としてなだれ込んできた時には、ネイティヴィズム運動によりカトリックのアイルランド人も差別や抑圧の対象になったのであり、ましてや、黒人やアメリカ先住民や東洋人は「坩堝」の中に入れてもらえなかったことを考えると、エマソンの慧眼には感服せざるを得ない。

だが、国璽の理解に関してマイケル・ウォルツァーは、アメリカの国璽の図像(The Great Seal of the United States)の表を解釈し、そこにあるのは鷲がひと束の矢をつかんでいるという図像であって、「ここには吸収も融合もなく、たくさんの矢がひとまとめにされてしっかり掴まれているにとどまる。…つまり、ここには、多から一への動きはなく、むしろ、同時性、共存、つまり、一の中の多(many-in-one)こそが存在するのだ。」と解釈し、国璽のラテン語“E Pluribus Unum”の前置詞E(～から)は間違った前置詞だと指摘する(Walzer 26)(図版1)。ウォルツァーは多文化主義的視点から人間の民族的・文化的要素の否定しがたさ、アメリカの一なるものへの融合と同化の難しさを指摘するのだが、この個人の民族性・文化性の維持とコミットして行くアメリカ的なもの(アメリカ性、ないしはアメリカの共通の理念)が生きる場



図版1 アメリカの国璽

としてのアメリカの政治的・社会的状況の中でどのように関わっていくのか、という問題が悩ましいことであり、この点が、多文化主義論争の本質的部分である。ただし、アメリカの特徴、アメリカ性、アメリカニズムを構成するところの移民によって成り立つ国、ピューリタニズムからくる「聖地」としてのアメリカ、建国の理念、近代資本主義等の内容は、いずれも歴史や過去の否定と未来志向をその根幹に持っている。したがって、民族や文化の価値が評価され尊重されればアメリカの基本理念や神話、つまりアメリカの国家的アイデンティティが崩壊することになりかねない。最近の文化戦争の傾向はアメリカ国家の成立基盤が理論的に崩壊するのではないかという危惧さえ抱かせる内容を持っている。しかしその問題の根源は、人間が生きていく上で不可欠な歴史的、文化的、宗教的側面を捨象したところの理念的・抽象的側面にアメリカの国家が成立しているところにある。

さらに、アメリカの国家形成の理念には、メイフラワー号のピューリタンたちによる神の国の建設という理念があり、それは19世紀初めに西部に国土が拡張されてゆくときにアメリカという国の理念とイメージの再確認の必要性が

ら、R.W.B.ルイスが『アメリカのアダム』の中で論じた、いわゆるアメリカを「ニュー・エデン」、アメリカ人を「ニュー・アダム」と考える神話が強まる。それは、神から人類に与えられた第一の機会が、黄昏の旧世界にあって悲惨な失敗に終わった後、神が第二の機会を与えてアメリカに神の御国を建設するように命じた、という考えである。つまり、ここには旧世界の「腐敗」と「墮落」的状况に対置された「聖地」としてのアメリカという途方もなく壮大な国家像のメタファーがある。このルイスのいう「アメリカのアダム」は「歴史から解放された個人であり、…そしてこの個人は一人で立ち、自らに頼り、自らの力で前進し、彼独自の生得の力により、たとえ何が彼を待ち受けようとも、これに立ち向かう用意があるのだ」(Lewis 5)という人間像であるが、このアメリカのアダム像には、まず、第一に、アメリカ人を歴史や伝統や習慣から解放された独立独歩の人間としてみる人間観があるが、ここにはヨーロッパとイギリスという旧世界の強力な否定のみならず、それらを一般化した過去そのものの否定がある。いかなる人種・民族であれ移民としてアメリカにやってきてアメリカ人になるためには過去を否定し振り捨てて未来志向の人間になることが必須の条件であることを暗示している。ヨーロッパや宗主国のイギリスからの相違や異質性を強力に主張することになるこの「聖地」としてのアメリカのイメージに加えて、アメリカの国家形成の抽象性や理念性を強めるのは、独立宣言文や憲法に表明された自由、平等、社会的契約にもとづく統治への同意、という原理であった。その主たる理由を、古矢句は、「独立戦争が、民族独立戦争ではなく、同じエスニシティに属するイギリスからの独立を求めた戦争であったので、したがって、イギリスへの反抗や独立を正当化する原理を、エスニシティには求めず理念に求める以外にはなかった」(古矢 8)と指摘する。

このように、アメリカは国家形成のプロセスや国家理念や国家像等が持つ、移民によって成り立つ国、聖地としてのアメリカ、建国の理念、近代資本主義(資本は本質的に民族、文化、国境を越える性質を持つこと)等の諸要素は、いずれも、アメリカが歴史や宗教や民族や文化を否定し、それらを越えて未来を志向していく性質を持っているのであり、この点は、最近の多文化主義が行っ

ているそれぞれの民族の歴史や宗教や文化の主張とは本質的に矛盾し相容れないものであり、多文化主義者の主張のほとんどを通せばアメリカは国家理念が崩壊し国はバラバラになって解体するであろう。しかし、アメリカの建国のプロセスと理念と国家像は、あまりにも抽象的、理念的であり、歴史や文化や宗教を捨象した国家形成など観念的、非現実的で無理があった。人間観としても歴史や宗教や文化を否定した人間観などありえないし、アメリカを「ニュー・エデン」として見る「聖地」としてのアメリカという国家像は途方もなく壮大なものだが、原住民のインディアンの側から見ると迷惑千万な途方もなく身勝手な考えであり、(西洋の植民地はアメリカに限らずこういう一方的な武力による身勝手さによって形成されていったことも事実)さらに、建国の理念の中にある自由と平等という思想には、対象となるのは白人男性でありアメリカ原住民や黒人や女性は含まれていないという差別があった。このようなアメリカの国家理念や国家像には抽象的、理念的、というだけではなく、そこに大きな不正や錯誤や差別が内包されていたのだ。わかりやすく言えば、アメリカの建国はインディアンの土地を奪って黒人の奴隷制の上に成り立っていた。それをシドニ・カプランは「アメリカの国家的罪」(“the American national sin”) (Kaplan 312) と言うが、多文化主義論争は究極的にはアメリカの国家理念や国家像をどのように考えるか、アメリカ人とは何か、というアメリカの原点に立ち返ることが必要になる。

3) 文化戦争前史

文化戦争のピークは1980年代から90年代だが、それまでのアメリカの文化についての議論を踏まえておきたい。

前述したように、19世紀まではクレヴクールやエマソンなどの「坩堝」論が主流を占める。19世紀の中頃に白人のプロテスタントの文化形成を強く求めるネイティヴィズ運動がある。これは、1840年代から50年代にアメリカ経済の工業化や都市化が進むと、労働者を移民に頼ったという事情もあり、1845年から1854年の9年間に300万近くの移民労働者がアメリカに殺到した。このときの移民は主にドイツ人とアイルランド人だったが、アメリカ生まれの市

民と移民との間でさまざまな緊張や軋轢があり、ドイツ人は主にプロテスタントであったために、特にアイルランド人を排斥する反カトリック運動に発展している。(有賀、木下、他 379-383)

次に、アメリカは第一次世界大戦から戦後にかけて保守的風潮が強まり、不寛容精神が高まる。そして、19世紀末以来急増する南欧や東欧からの移民に対しては「100%アメリカニズム」が求められたという時代背景において、哲学者H.M.カレンの文化多元主義に関する論文が『ネイション』誌に二回にわたって発表された。カレンの主張は、植民地時代や建国時においてはイギリス系アメリカ人の精神や文化がアメリカでは主要なものであったが、今日では「主要なアメリカ精神」(dominant American mind)はなく、いかに「不協和音」(cacophony)から秩序を作り出すかが問題だと言う。(Kallen 217) カレンは、ウィスコンシン州のドイツ系、ミネソタ州のスカンジナヴィア系、マサチューセッツ州のアイルランド系、ニューヨーク州のユダヤ系等、アメリカにおける民族集団はそれぞれの民族の歴史や宗教や文化を維持しながらメンバーの絆を維持しているのであり、アングロ・サクソン文化に吸収されも同化されもしない多様性を保っているのが現状であると指摘する。カレンは、アメリカに渡ってきた移民は四つの段階を経ると言う。第一段階は、経済的自立のためにアメリカ社会に形の上では「同化」する。第二段階では、一定の経済的自立が達成されると「同化」のプロセスはスロー・ダウンするか停止し勝ちになる。この段階の移民のグループの生き方は環境の影響によって修正されたり改善されたりしているが依然として民族集団である。第三段階では「不同化」のプロセスが始まり、民族の芸術や生活や理想が中心となり非常に強くなる。この間、移民は、英語を話し経済的、政治的な事柄に関してはアメリカ人として振舞う。第四段階では、アメリカの諸制度はむしろ移民を解放する原因となり移民の文化意識や社会的自立が強まる背景となる。つまり、アメリカ化(Americanization)は、民族性を抑圧するというより解放する要因となるのだ。(Kallen 219) このようにカレンは、移民の民族的文化や習慣や宗教は容易には同化されないことを強調する。そして、移民たちがアングロ・サクソンのアメリカ人と共通にまた均質に持つもの——カレンはこれを「同じ考え」(like-

mindedness) や「類似性」(similarities) という言葉を使う —— が移民にとってアメリカ社会で生活する上では必要だが、それらは表面的なもので、経済的、政治的なレベルのものであり、また、メディアや大衆文化的なものであるという。そして、共通なものの中に決して入らないものとして、民族的精神を考え、「人間の生活の中で譲渡できないものが本質的に肯定すべき特質であり、それは精神物理学的遺産 (psychophysical inheritance) である」と言う。(Kallen 259) カレンは、「譲渡できない」という言葉に “inalienable” を使っているので、明らかに、独立宣言文の中に使われた言葉 (unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness) を意識している。さらに、その譲渡できないものを「精神物理学的遺産」と考え、「人間は、服、政治理念、妻、宗教、哲学などは、多かれすくなかれ、変えられるが、祖父は変えられないのだ」(Kallen 159) と言う。そして、アメリカの文化は、各民族がオーケストラの各パートとなって独自の音色を持ちオーケストラというアメリカ全体が民族の多様性からなり、一致協力して (unison) 美しいハーモニーを奏でる社会であるべきだと主張した。カレンの主張は、人間を個人としてより家族や先祖や民族と切り離せない存在として捉え、「生物学的には生命は統一する (unify) より多様化する (diversify) ものである」(Kallen 219) というように、人間が自然な本性的なものから出られないものとして規定する傾向がある。このようなカレンの人間観は人間を集団や民族的要因や人種・遺伝という生物学的要因の中に閉じ込めるもので、人種主義や本質主義に近づくものと言え、アメリカの理念の特徴としてある集団や人種から離れた一人の個人としての人間観がないこと —— この点は前章で見たアメリカの国家理念と決定的に対立するのでアメリカでは受け入れがたいものである —— や人間が後天的に学び獲得していくものの重要性に対する言及もない。また、民族をオーケストラの一パートとして考えているが、オーケストラの主旋律 —— アメリカをひとつの国家としてまとめていく共通の理念 —— が何であり、またオーケストラの指揮者は誰であるのかをカレンは明確に述べてはいない。さらに、カレンの論文にはアメリカ原住民や黒人に関する言及がない、というような欠点がある。しかし、移民がアメリカに適応して行くおおよその

プロセスは的確に述べているし、20世紀初頭のアメリカ純化運動の最中において「坩堝」論批判を展開したことは十分に評価できるし、1980年代から始まる多文化主義論争の先駆けの論文としても意義のあるものである。

次に、カレンの論文の一年後の1916年に出された重要な論文としてランドルフ・ボーンの論文がある。ボーンの論文も、カレンの論文と同様に当時の社会風潮であったアングロ・コンフォームィティ、つまり、「坩堝」論を批判する論文だが、カレンの論文とは結論部分でかなり内容が違う。ボーンは、アングロ・サクソンのイギリス人が初期の植民地を形成し、イギリスから持ち込んだ政治、社会、文化の諸制度を作りそれらを後から来た移民に押し付けた（そのことにはアングロ・サクソンに罪があるという）ことは確かだが、「他の文化が溶けたり (melted down) 結合して何らかの同質の (homogeneous) アメリカニズムになるようなことはなく、むしろ、はっきり違うままに留まって、協力してより大きな栄光や長所を作り出した。」(Bourne 175) と言う。また、アメリカ文化は複雑に混じり合い (mingled) さらに合流すること (merge) はあっても、融合する (fuse) ことはない、と微妙な文化と人間の接点を表現する。(Bourne 176) さらに、こういうアメリカにはまだ多民族を強制し統合する力はない... また、明確なアメリカの文化というものもなく、あるのは“文化の連合体” (a federation of cultures) であり、変わりつつあるアメリカニズムの理想から考えるとアメリカ文化の伝統は未来にこそあるという逆説をわれわれは実行しなければならないのだ ... われわれが作り上げたのは、(多くの)「民族による植民地と異なる文化のコスモポリタンの連合体」(a cosmopolitan federation of national colonies, of foreign cultures) なのであり、アメリカはすでにミニサイズの世界連合 (the world-federation in miniature) なのだ (Bourne 176-177)、と言ってボーンは、「連合」(federation) と「コスポリタニズム」(cosmopolitanism) をキー・ワードとして、国家性と民族性を越えるものとして「民族横断的精神」(trans-national spirit) の重要性を訴える。そして、「アメリカ人が結びつくのは「坩堝」という過去のロマンティックな理想ではなく、未来であらねばならない」(It must be a future America, on which all can unite, ...) (Bourne 180-181)

と、アメリカの理想は未来にあることを強調する。このボーンのアメリカ文化論は、「坩堝」論の人種や文化の融合と混合を否定し、それぞれの文化の特徴をなくすことなく混交することによって起こる文化の相互作用が新たな文化を生み出すコスモポリタニズムにアメリカの未来をかけている。ボーンはアメリカが多民族国家であり世界の縮図であることを的確に表現しているが、ただし、人間や文化は交流や接触があれば融合と混合は何らかの形や程度では生まれるものであり、また、避けられないものだから、ボーンのように、アングロ・サクソン文化への拒絶感情が強すぎて、融合と混合を否定しながら混交するというその差が非常に微妙な人間や人種や民族の関係を指摘する。そして、ボーンの議論の中には、アメリカの先住民族のインディアンと黒人が議論の要素に入れられていないという問題もある。しかし、このボーンの主張は、アメリカの建国の理念はいまだ達成されていないもので未来にあるものだというもので、この点では後のアフリカ中心主義を主張するアサンテの主張に近いものだ。

1910年代のカレンやボーンのアメリカ文化論の主要な点は19世紀来の「坩堝」論が第一次世界大戦中や大戦後のアメリカの政治・経済システムと文明を維持し擁護しようとする保守的で不寛容な時代に強くなったアメリカ純化運動に対する批判として出された論文であるが、二人に共通するのは、まずはアングロ・サクソンのアメリカの国家理念や政治的、社会的共通理念の中に融合し、混合していくという従来の「坩堝」論への批判、反発であり、捉え方は違うが、アメリカにおける政治、社会、文化の共通性（カレンにおいては、政治的、経済的、社会的次元における“like-mindedness”や“similarities”，ボーンにおいては、“a federation of cultures”や“cosmopolitanism”という考え）は認めて、それとは別に多様な民族の歴史や文化や宗教があることを強く主張することであった。二人の主張は、60年代以降よく言われる多文化主義（multiculturalism）と区別して、カレンが言った「文化多元主義」（cultural pluralism）と言ってよいであろう。だが、カレンとボーンには、「坩堝」論に反対しアメリカには他民族による多種多様な文化があるという共通の認識はあるのだが、80年代や90年代の多文化主義との違いが明確ではないところがある。あえて違いを言えば、文化の捉え方と、「共通性」の概念内容の認識とそ

れの受け取り方の違いであろうが、多文化主義のほうが、どちらかと言えば、「共通性」をあまり認めない傾向がある。

4) 文化戦争

その後、アメリカ文化についての議論は60年代に入るのだが、文化多元主義と60年代以降の多文化主義の違いの大きな要因は、60年代革命と民族独立運動から生まれたアメリカにおける人種や民族と文化の関わりの問題であろう。この時代の多文化主義には、カレンやボーンなどがほとんど言及しなかった少数民族の主張、特にその中でも、前に述べた60年代の世界的民族解放運動と連動した公民権運動や「エスニック・リバイバル」などにより、アフリカ系アメリカ人の主張が強く表面に出てくる。さらに、1980年代後半から90年代にかけてニューヨーク州やカリフォルニア州等で公立学校の歴史教科書の改定の議論があり、それまでの、アメリカに関する共有できる知識や共通の物語、つまり、自由や平等という建国の理念や進歩の物語がアメリカの基本的歴史観であったところに、アフリカ系アメリカ人の奴隷制やその後の非人間的、差別的取り扱いなどを教科書の中に入れるようにという主張が大幅に受け入れられ、共通のアメリカという古い伝統がかなり崩れてしまったという状況があった。90年代初期から「文化戦争」（Culture Wars）と言う言葉がかなり浸透したが、それは、J.D. ハンターの『文化戦争：アメリカの定義をめぐる闘争』によるところが大きい。ハンターは、最近の文化戦争は、宗教も含めて、

墮胎、子育て、芸術の基金、積極的差別是正措置、割り当て制度、同性愛者の権利、公教育の価値観、多文化主義等の、議論されているあらゆる分野の問題についての政治的な不一致の核心は、究極的に、また、最終的には（善悪、正誤、受け入れ可能か否か等、を決定する）道徳的権威（moral authority）をどこに置くかということに辿れる。（Hunter 42）

と言う。80年代以降文化戦争が激しくなったのは、少数民族、特に、黒人の多方面における要求に対して、ベルリンの壁の崩壊やソ連邦の解体に伴う東西

冷戦構造の終焉のあと、アメリカの自由主義や資本主義体制が優位になった世界状況を背景として、アメリカ国内における、ハンターが言う「道徳的権威」の失墜に対して保守派の懸命な巻き返しにあるといわれる。その代表的な学者がアーサー・M・シュレジンガー Jr. であり、アラン・ブルームである。シュレジンガーは、その著書『アメリカの分裂：多文化社会についての所見』において次のように主張する。

まずシュレジンガーは、他民族の混交によって新しいアメリカ人が生まれるというクレヴクール以来の人種の「垣塙」論を述べる。彼は、アメリカ人は多様な民族からなる人々がアメリカの習慣や生活方法や法律に同化することによってひとつの国民となり、そこに国家的アイデンティティを生み出していきるのであり、国民は過去の文化を維持するのではなく、今から作り出す新しい文化の中に生きるという未来志向をしめす。そして、新しいアメリカのナショナリティは建国以来のアメリカの歴史と、言語と思想と制度などのアメリカ社会や文化の基礎から判断して、アングロ・サクソンのことは避けられないと言い、そして、アメリカ人を結集させる理念は民主主義と人権思想であると言う。つまり、シュレジンガーは、私的領域では多数の民族の複数の文化が存在することは認めるが、公的な共通の文化の領域では歴史のプロセスから単一のアングロ・サクソンのヨーロッパ文化と政治制度の存在が、アメリカが国家として存続していく場合に不可欠であることを主張する。そして、アメリカの過去においては、民主主義と人権思想が十全にすべての人民に適応されず、特にインディアンや黒人に対して不正や悪を行った、と言ってアメリカの過去の罪状を認める。ただし、その直後に、いかなる人種、文化、国民も一時期には何らかの罪を犯したり悪事をはたらいたりしたものだが、最近の多文化主義のような分離主義者は、アメリカの罪だけを告発しその長所である民主主義、市民の自由、人権思想を生み出したヨーロッパ的アメリカの基礎を認めずそれをただ悪の根源であると批判するのは、国を混乱させ分裂させるだけだと主張する。多文化主義者はアメリカを個人によって成り立つ国というよりも民族や人種のグループによって成り立つ国であるという考えを出したが、これは個人の同化や統合によって成り立つという歴史的アメリカの国家理念や目標を拒否するものであ

り、彼らは違いを強調し緊張感を拡大させ、敵意を増大させるものであり、これが無制限にすすむと、アメリカの生活様式の断片化と再分離と民族化をもたらし、アメリカを分断させ混乱させる結果となる、と強く黒人を中心とする多文化主義者に警告を発し、次のように指摘する。

(多文化主義者の) 民族性崇拝はアメリカの歴史の動きを逆転させた。

多数集団と一緒に共通の努力をすることに関心を抱くよりも、むしろ、抑圧的な、白人の、家父長的な、人種差別的、性差別的、階級的社会から自らの疎外を宣言することに関心を持つ少数民族派の国を作り出しつつあるのだ。(Schlesinger, Jr.112)

シュレジンガーは、他民族の混交と、自由と民主主義というアメリカの国家理念への同化と統合による一つの国民形成という考えを明確に、ある意味で、見事にまとめている。ただしこれは、従来の保守派の意見を代表したもので、現状肯定的で結果的に白人の文化的ヘゲモニーを擁護し、差別と抑圧と支配の構造を追認し、現状維持を承認することにしかない。特にシュレジンガーは、アメリカのマイノリティ（特にインディアンと黒人）に対して行った不正と悪をどんな国でも不正や悪を行うものだと一般化することによって、アメリカの特殊性を曖昧にし、責任の所在をぼかしている。従って、60年代からなぜマイノリティ・グループが彼らの民族文化とアイデンティティをアメリカ社会において強く主張し、それを学校や社会において具体化する運動を展開するのかという点に対する回答が弱いし、さらに文化と政治的、経済的状況の緊密な関係についての視点がないので、マイノリティが置かれている差別と抑圧と社会的、政治的、経済的な悲惨な状況に対する言及もない。

シュレジンガーのような保守派の巻き返しによって、60年代に作られた「積極的差別是正措置」を見直せという動きが90年代に出てくる。(筆者が研究者としてボストンにいた94年から95年にかけてもこの法案に対する賛成と反対の両方の運動や集会があり、たとえば、『ニューズウィーク』(April 3, 1995)と『ニュー・リパブリック』(April 3, 1995)の両誌にそれぞれ

“Affirmative Action: Race and Rage” “Class, not Race: An Affirmative Action That Works” というタイトルで特集記事が載った。) 法案廃止賛成者の主な理由は、民族単位のこの法案は個人を対象とするアメリカの国家理念に矛盾するものであり、社会問題として改善や改革をしなければならないのは人種ではなく個人や階級なのだと主張する。他方、この法案の継続に賛成する者は、この法案は成立してからまだ30年しか経っておらず、アメリカの長い差別と弾圧と支配の歴史を考えれば、それらを是正するためにはこの法案の継続は当然であるという主張である。カリフォルニア州では州としてはこの法案を廃止している。

保守派に対する多文化主義者の急先鋒はテンブル大学のアフロ・アメリカン・スタディーズ 学科のモレフィ・ケート・アサンテ教授である。アサンテ教授の論文は1991年の『アメリカン・スカラー』誌に掲載されたものだが、アサンテは次のように主張する。

コロンブスが航海を始めた1480年以降の、アフリカを含む世界に関する知識において、ヨーロッパ人がほぼ完全にヘゲモニーを握って情報を支配し事物を命名し概念や解釈を広げて今日に至っているが、過去500年の歴史上近年になって始めて、西洋の覇権主義的ヨーロッパ流の考え方からおおむね解放された学者のグループが、おびただしい数の歴史の歪曲を暴きだすようになったと述べ、過去500年のヨーロッパとアメリカの関係を踏まえながら、次のように言う。

われわれが過去25年間に目の当たりにしてきたのは、白人優越の事態に合致した教育システムがゆっくりと解体しつつあるということである。

いまや白人の覇権を支えてきた知識体系はもはや弁護されないし、白人は他の人種よりも上でもなければ下でもない、白人以外の人々と横に並んだ立場に立たねばならない。(Asante 268)

と言って、白人の文化的ヘゲモニーを否定し、完全な対等の立場を主張する。そして、具体的には、教育の現場やカリキュラムで、すべての項目すべての単

元においてアフリカ系アメリカ人の研究成果が浸透し、アメリカ史の中でアフリカ人が果たした役割に対する知識、理解、承認が一般化することを求める。アサンテはさらに、「共通のアメリカ文化などというものは存在しない。... あたかも共通の文化であるかのごとく押し付けられたヘゲモニー文化ならば確かに存在している」(There is no common American culture as is claimed by the defenders of the status quo. There is a hegemonic culture to be sure, pushed as if it were a common culture.) (Asante 270) と言って、シュレジンガーが言う多民族が同化し統合することによって形成されるひとつの国民が作るアメリカ文化の存在を白人のヘゲモニー文化として手厳しく批判する。そして、「共通の文化は存在しないが、わが国はその方向を目指して進みつつある。共通の文化を得るために多くの困難に直面しなければならないにしても、すべてのエスニック集団を有効なカリキュラム作りの戦いに完全に参加させるならば、その可能性は高くなるだろう。」(Asante 271-272) と言って、国家としての共通文化の今の時点での不在とその必要性を主張する。

シュレジンガーとアサンテの主張の違いは、これを、煎じ詰めれば文化戦争の核心になるのだが、アメリカに公的な共通の単一の文化の存在を認めるか(シュレジンガー)、あるいは、その存在を認めずに共通の文化の複数性を主張するか(アサンテ)ということになる。アサンテは、アメリカのアングロ・サクソンを中心としたヨーロッパ文化を今日まで差別と支配と弾圧を続けてきたヘゲモニー文化として強く批判し、それをアメリカ文化の中心におくことを断固拒否する。アサンテは、ヨーロッパ中心文化に挑戦してアフリカ中心主義(Afrocentrism)を主張し、ヨーロッパ文明の起源はエジプト文明にあり、エジプト人はアフリカ人であるから、したがって、古代エジプト文明はアフリカ人によって建設されたのだと主張する。また、アサンテに近いアフリカ中心主義者のL.A. ホスキンスは、11万年前に地球に住んでいた人種はアフリカ人のみであり、また、アフリカ文化はそこからすべての文化が出てくる文化の起源であり、アフリカの歴史はヨーロッパよりも数千年も古いのだ(Hoskins 248)と主張し、アフリカ文化を強力にアメリカ文化の中心に置こうとする。アサンテは、「アフリカ中心主義はアフリカの観点を高く評価する一方で、ほ

かの民族を貶めるようなことはしない。この点において、アフリカ中心主義はヨーロッパ中心主義とは異なっている」(Asante 270) と言い、これはアフリカ系アメリカ人の「自負心と自尊心」(self-esteem and self-respect) (Asante 270) を高めるためには必要不可欠なことであると主張する。

こういう主張に対して、ダイアン・ラヴィッチは、アメリカの政治、宗教、教育、経済の体制がヨーロッパから来た子孫によって形作られことを基礎にして、現在では、いろいろな人種や民族のものからなる多文化的なものが共通の文化としてあることを認める。そして、特にアサンテが主張するアフリカ中心主義を「図々しいほど先祖崇拜的で、決定論的で、...このような個別論的多文化主義は、民族分離のイデオロギーであり、黒人の民族主義運動を煽動し、共通文化を否定するものだ。」(Ravitch 337-354) と批判する。さらに保守派の論客アラン・ブルームは、アメリカの独立宣言文の自由と平等の精神はアメリカが誇る自然権であり、「この自然権 (natural rights) の光に照らされたとき、階級、人種、国の起源、文化のすべては、消えるか霞んでしまうかする。移民者は、新たな教育が容易に身につくように、旧世界のさまざまな要求を忘れなくてはならない」(Bloom 27) と主張し、一方で、60年代以降の最近の文化相対主義と自民族中心主義は、アメリカの国家理念の根幹を揺るがし、また、西洋精神のもっとも特徴的なものである理性と科学をないがしろにするものだ、これらを強く批判する。

アサンテとホスキンスの主張は、これまでのヨーロッパ中心のアメリカ文明の差別と支配と弾圧を批判し、それに代わる、ないしは、対置する文明としてアフリカ文明を置こうとするが、基本的に彼らの主張は、前述したカレンの人種主義や本質主義をもっと強めた形の民族分離主義の向かう傾向にあり、シュレジンガーやラヴィッチやブルームが危惧する国家内の対立や混乱を生じさせ、また分離や分裂を生み出す危険性がある。問題は彼らがそのアフリカの文明を生かそうとし、そして、現実に人生を生きる場がアメリカであり、そのアメリカは歴史のプロセスとして、その善悪は別として、アングロ・サクソンのヨーロッパ文明が中心になっているということである。つまり、彼らはアフリカの文明を主張しながら、現実生活ではアメリカの独立宣言や建国の理念である自

由、平等、人権、というヨーロッパの文明を生きている、という現実である。この現実の二重性の根源は煎じ詰めればアメリカの建国にある。アメリカは、その国民が一定の土地に住み多少の相違はあってもほぼ文化や歴史や宗教を同じくし、政治や経済の理念や制度の中に生きるという国家ではない。前述したように、アメリカは、アメリカ人としての国民的要件を政治的、経済的ファクターとして、文化や歴史や宗教のファクターを否定した。この国家形成の人工性や理念の抽象性や観念性に根本的問題があって、もともとそれは国家として不自然であり無理があり、また、理念そのものの中に現実にそぐわない矛盾や不正を含んでいた。文化や歴史や宗教のファクターを否定した政治と経済のファクターのみによる共通性の形成というものは、そのほとんどの要素がヨーロッパ的な理念や精神で構成されているとはいえ、非現実的、非人間的で、マジョリティを構成する白人にとっても強い違和感を持つ制度であろう。たとえば、メルヴィルやポーやフォークナーやオースターという19世紀と20世紀の大作家が、それぞれ『バートルビー』、『アッシャー家の崩壊』、『エミリーへの薔薇』、『シティ・オブ・グラス』などのよく知られた作品で、それぞれその内容は違ふとはいえ外部世界に徹底して背を向けて自己の家や部屋に閉じ籠る、という自己幽閉のテーマの作品を書いていることは、主人公たちがその理由の一つとして文化的ファクターを切断して政治的ファクターによって国家的アイデンティティを形成してきた社会に否を表明しているのだと言える。しかし、だからといって、現実の国家としてアメリカを否定することは出来ないし、アメリカのように植民地から独立した国は世界には多くあり、また、近代の国家建設にはアメリカほどではないにしても、西洋列強間の恣意的な政治的思惑や利害による線引きによって国境が決定された国が多く、したがって、多文化主義を国家政策として採らざるを得ない国は多い。

アメリカ人はマイノリティであろうがマジョリティであろうが、アメリカ性と民族性、民族の文化、歴史、宗教とアメリカの政治、経済の分断、国家理念と現実、個人と社会、等のいろいろな矛盾・対立と二重性を生きざるを得ないのではないか。もちろん矛盾・対立や二重性のなかに、既存の支配階級のヨーロッパ系の白人の文化的ヘゲモニーがあるから、それを現実に是正する政治的、

社会的政策は必要であろう。たとえば、公教育の中にもっとマイノリティの文化や歴史を取り入れるべきであろうし、それによって、従来キャンノンの言われてきた古典が取り扱われることが少なくなっても仕方が無いだろう。また、「積極的差別是正措置」は個人を基本的単位とする国家理念に反するからこの法案を廃止するべきだという考えは、長い間差別と弾圧を受けてきたマイノリティの現実を無視した観念的な考えである。国家理念のなかに不正や矛盾があり、多民族国家で一定の民族が優位な立場を維持してきた過去の経緯があり、差別され弾圧された民族には特別な措置を取るとというのが現実的政策であるので、この法案はもっと続けていくべきであろう。しかし、他方、マイノリティもアメリカで生活をする限り、建国のプロセスやヨーロッパ的文化や政治制度によって生み出された理念を無視することは出来ないし、何らかのアメリカの国家のアイデンティティや共通性を（その内容を確認する作業は必要であろうが）認めていこうとする姿勢は必要であろう。ハーヴァード大学のアフロ・アメリカン・スタディーズ学科の主任教授のヘンリ・ルイス・ゲイツ Jr. は、次のように指摘する。

多くのことを一度に全体として見て、互いの価値を理解し相互依存する力を涵養することが大学の使命であり、... 共同して自己と他者を発見することを通して、葛藤、その内容、自己主張などを融和、相互性、認識、創造的交流等に変えてゆくことが高等教育機関の役割である。...われわれの住む世界はすでに多文化主義的であり、混合と異種混淆 (mixing and hybridity) は例外ではなくすでにルールとなっている。(Gates, Jr. xv- xvi)

つまり、ゲイツ Jr. は、多民族と多文化の相互理解と相互依存の重要性と、アメリカ文化はすでに多文化主義的で混合と異種混淆が現実であると論じる。そして、

今日、ただ（文化の）違いを心無く持ち上げることは、ノスタルジックに単調な同質性に帰ることを主張することと同様に支持されない。私の希

望は、たとえごちなくとも、その中間の道を探ることに寄与することである。」(Gates, Jr. xix)

と言って、「違い」を強調する多文化主義者と「単調な同質性」を主張する保守派のヨーロッパ中心主義者の両方を批判しその中間の道を探ろうとする。このゲイツ Jr.の考えは、最近ポストコロニアル批評の指導的批評家として注目されているホミ・バーバの理論に近い。バーバは言う。

批評の有効性とは、対立の当面の基礎を克服して、何らかの翻訳空間を開くことがどこまで可能かという問題である。それは比喩的に言えば、異種混淆の場を開くことだ。その空間では、二項対立のどちらか一方ということではなしに、新たな政治目標が設定され、それによってわれわれが政治に寄せる期待の地平が当然ながら異化される。(Bhabha 25)

バーバの理論はアメリカの文化状況を論じたものではなく世界のポストコロニアル的状况に対する一般論を述べたものだが、アメリカの文化状況に対しても十分に通用するものである。彼は、対立する状況のどちらか一方ではなく、両方の力の作用からそこに生じる裂け目や矛盾や二重性に注目し、そしてそこから出てくる「異種混淆性」に可能性を求める。また、バーバが指摘した次のようなファノンのアイデンティティの二重性は、ほぼそっくりアメリカのマイノリティ、特に、黒人のケースに当てはまるであろう。

ファノンの『黒い皮膚、白い仮面』が暴露するのは、アイデンティティのそうした二重化だ。一方には、現実の暗示ないしは存在の直接的知識として個人のアイデンティティがあり、もう一方には、主体に問いを発し続ける精神分析的な同一化の問題があって、この二つは決して一つにはならないのだ。(Bhabha 72)

このアイデンティティの二重性は、強いられたものとはいえアメリカ黒人が

常に意識せざるを得ない状態であり、W.E.B. デュボイスがすでに指摘していた二重性である。

...彼はいつでも自己の二重意識 (double-consciousness) を感じている。アメリカ人であることと黒人であること。二つの思想、二つの調和することなき向上への努力、そして一つの黒い体で闘っている二つの理想。しかもその身体を解体から防いでいるものは、頑健な体力だけである。(Du Bois 3)

ゲイツ Jr.やバーバやデュボイスが言うように、アメリカのマイノリティは、その中でも特に黒人は、このような二重性や矛盾や異種混濁性を生きざるを得ないのであろう。だが、二重性や矛盾や異種混濁性という状況は、何もマイノリティの置かれている状況に限らず、マジョリティの置かれている状況でもある。サイドは、第一世界と第三世界の関係を今までのような第一世界の支配と弾圧、第三世界の第一世界に対する過去の罪状の告発という関係ではなく、第一世界と第三世界の「地理と物語と歴史の違いをも通して共存したり角突き合わせているという“文化領域における相互依存関係”(interdependence of cultural terrains)」(Said xx) の構築の必要性を指摘し、さらに次のように言う。

いかなる文化も単一で純粋ではない。すべての文化は異種混濁的でかつ異分子より成り立っており (all are hybrid, heterogeneous), 異様なままで差異化され、一枚岩ではないのだ。思うに、このことは現代のアラブ世界のみならず、現代の合衆国にもあてはまる。(Said xxv)

世界の国々の中には人種や民族の構成がそれほど複雑ではない国もあるので、サイドが言うように「すべての文化は異種混濁的でかつ異分子より成る」のであれば、個別の国々の文化的特殊性がなくなり、また、このように一般化しすぎることによって、アメリカの多文化的特殊性が薄れその分析と考察が甘く

なることも考えられるが、アメリカの状況としてはサイドが指摘するとおりであり、アメリカ人は、相互依存性と、二重性や矛盾は異種混濁性を生きる状況として今後も長く引き受けていかざるをえないであろう。

5) 理論と社会的、政治的实践

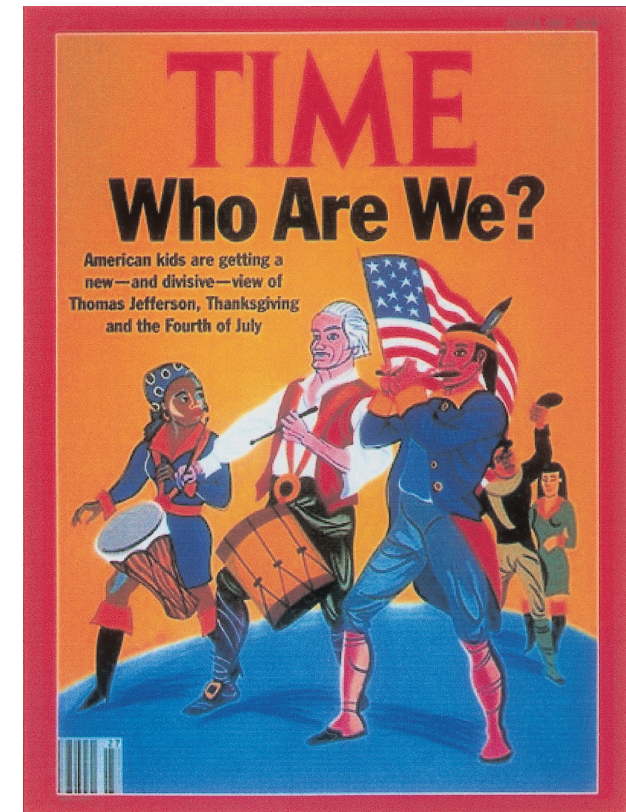
だが、この方向性は理論的なもので、アメリカの文化戦争における論争では、理論を社会の現実においてどのように政治的政策として反映し実行するかということが大きな問題としてある。文化論の背後には現実に生きている人間の問題がある。理論の実践化が文化論と文学論の大きな違いとしてある。理論を現実の政策へ具体化するという点では、たとえば、学校におけるカリキュラムの見直し、50年代から60年代の公民権運動では、バスの座席やレストランや公共の建物の利用をめぐる問題、学校の統合の問題、職業の雇用における差別や賃金の格差等、文化戦争は常に社会における現実の差別や不正や(特にマイノリティの) 貧困の問題を政治的にどのような政策により解決するかが重要であった。

文化は国の社会的、政治的、経済的システムと深く関連しているが、コーネル・ウエストは彼の著『人種問題』において、現在アメリカの黒人が置かれている状況を次のように説明する。アメリカの労働者の賃金は、1970年初めから1990年までの20年間に実質賃金が約20%下がり、この間に貧富の差も拡大された。これは資本が無人格化し、無国籍化し、安い人件費を求めて国内や国外に移動すること、テクノロジーの進歩と変化、政府の中産階級優遇政策、政治家の大企業への肩入れ、等によってもたらされた。教育程度が低く、未熟練労働者が比較的多い黒人はこの政治・経済状況の影響をもろに受けて、たとえば、貧困家庭の子供は、アメリカ全体では5人に1人だが、黒人は2人に1人に跳ね上がる。特に都市人口の多い黒人にとって、資本の移動によって都市から仕事なくなることは大打撃であり、市の住宅政策によって富裕な白人は郊外に住み、貧困な黒人は悪化する環境の都市に居残る、いわゆる、「ドーナツ現象」とか、“chocolate cities and vanilla suburbs”と言われる現象が生じる。そして、白人の郊外への移住と一緒に仕事も郊外へ移っていく。アメリカ

の富の所有に関しては、自由、平等、機会均等を国家理念とするアメリカで、1992年の統計では人口の10%の人が86%の国の富を所有しているという極端な格差が生じている。これにより、黒人の約半数がアメリカの政治、経済、社会、教育等のシステムによって貧困の中に閉じ込められている。その結果、失業、飢え、ホームレスの状態に陥り、病気、麻薬、犯罪、などが黒人の中に蔓延していく。そして、これらのさまざまな黒人の状況は、精神の貧困を生じさせ、希望の無さ、自己の無価値観、自分も他人も愛せないこと、家族と隣人との絆の崩壊などの、生きることの意味の解体を生じさせ、黒人を深いペシミズムとニヒリズムに陥れている。(West 9-12) 現在のアメリカの社会体制が続く限り、権力と富の集中と社会的不平等によって、大多数の黒人は社会の最下層の貧困の中に幽閉されて決してそこから出てくることは出来ない。さらにウェストは、アメリカの自由と民主主義という理想は、土地も財産も運もないすべての人々を組み込むものでなければならず、そして、社会の基本的財産である住居、食料、教育、子供の養育、健康管理、仕事等には、いかなる国民も利用できる公的な機関が大規模に介入できるような体制が基本的には必要であると言う。したがって、ウェストは、黒人の大多数は、「積極的差別是正措置」がなければアメリカの繁栄に与えることは出来ないし、職場におけるレイシズムがなくなることもない、「積極的差別是正措置」は、黒人の貧困をなくそうとすれば、むしろ強めていかなければならないものであり、富の再配分 (redistribution of wealth) の一部なのである (West 93-99)、と言って、現在のアメリカ社会の不正と不平等を是正する社会体制の構築と限られた一部の人間に集中する富の再配分政策の必要性を指摘する。富の再配分に関しては、第一次クリントン政権において労働長官をしたブランダイス大学教授のロバート・ライシュは、最近のアメリカは好況にもかかわらず労働者の賃金が減少している結果、アメリカ社会は急速に「持てるもの」と「持たざるもの」の二つの階層に分断されつつある。富の93%は上位五分の一の層に集中しており、これほどの富の集中はアメリカの歴史上でも珍しい」と述べて、貧富の格差の拡大が、犯罪や民族主義の台頭という非常に深刻な社会問題を引き起こす可能性を指摘し、富の再配分政策の早期実施を呼びかけている (ロバート・ライシュ

『日本経済新聞』1998年4月22日)。文化論争の場合、現実に多民族、多文化の社会の中で生きている抑圧され差別された、そして、現にされている人間がいるのであり、理論を出来るだけ政治的、社会的な現場で実践していくことが肝要であり、これがないと理論は空論に終わる可能性がある。

最後に、1991年7月8日と1993年11月18日の『タイム』誌の表紙を飾ったイラストと写真の意味を考えたい。1991年7月8日の表紙に、おそらく建国時の独立義勇軍の先頭に立つ鼓笛隊と思われる人たちの姿が描かれている(図版2)。中央に白人の鼓手が立ち、その両脇に笛を吹く頭飾りをつけたネイティブ・アメリカンとアフリカの太鼓を打ち鳴らす黒人の女性を配し、その後



図版2 Time (July 8, 1991)

ろに男性らしいが民族が明確ではない人物とアジア系とはっきりわかる女性が立っている。イラストの雰囲気は明るいのだが、イラストの上には「われわれは何者か」(Who Are We?)というタイトルがつけられ、その下には、「アメリカの子供たちはトーマス・ジェファソン、感謝祭、7月4日について新しい、そして分裂を含む見方をとりつつある。」と書かれている。1991年のことだから多文化戦争が激しい時期でアメリカとは何か、アメリカ人とは何かを激しく議論され深刻に問われたことが反映されている。書かれた言葉からわかるように、その問いかけは建国の理念まで遡及するものだ。2年後の1993年11月18日の特別号の表紙を美しい女性が飾っている(図版3)。沢山の顔が背景



図版3 Time (November 18, 1993)

となり、タイトルに「新しいアメリカの顔」とあり、この女性はいくつかの人種の顔をコンピュータで合成して作ったものという説明がある。この女性は美しく魅力的であるが、この合成写真の女性をアメリカ人の将来像としてみ、またこの女性をアメリカの多人種、多民族の融合、混合とそれが創る共通文化の成果としてみることは、多くの矛盾や対立や分裂を抱えるアメリカとしては、もちろん楽観的で希望的すぎる観測だろう。だが、この女性が多人種の合成によって出来ているというところに、ゲイツ Jr.やバーバやサイドが指摘する、この女性の中にアメリカ文化の雑種性や異種混溶性が生み出す可能性と希望を見出そうとしていると言えなくもない。トッド・ギトリンは、実際に、20世紀の後半にアメリカにおいて人種の混交が驚くべき割合で進行していることを報告している。(Gitlin 131) いずれにしても、『タイム』誌の二つ表紙のイラストと写真は、アメリカ人は絶えずアメリカとは何か、アメリカ人とは何かを問い続けなければならない存在であることを表している。アメリカは、民族の融合と統合による一つの国民形成や、自由と民主主義という建国の理念などは、理念と現実の齟齬や乖離が大きくて、アメリカの過去においてあったものではなく、現在においてあるものでもなく、いまだ実現されていないもので、常に未来にある理想であり夢であり、1776年に独立宣言を出したアメリカは、231年たった今でも建国の精神の意味を問いながら、アメリカ人としてのアイデンティティと文化のあり方を探求していくことであろう。(October 10, 2007)

.....

* この論文は九州大学文学部英文学科「英語英文学談話会」(2002年2月9日)および西南学院大学創立記念日(2002年5月15日)において行った講演の内容を基にしたものである。内容の骨子に変更はないが大幅な加筆と修正を施している。

引用文献

Alan Bloom, *The Closing of the American Mind* Penguin Books 1988.
アラン・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉』(みすず書房, 1988)

- Arthur M. Schlesinger, Jr., *The Disuniting America: Reflections on a Multicultural Society* W.W. Norton & Company, New York, London 1992.
 アーサー・シュレーンガー Jr. 『アメリカの分裂：多文化社会についての所見』（岩波書店, 1992）
- 有賀貞, 木下尚一, 他編 『アメリカ史 I』（山川出版社, 1998）
- ビル・アッシュクロフト／ガレス・グリフィス／ヘレン・ティフィン 『ポストコロニアルの文学』（青土社, 1998）
- Cornel West, *Race Matters* Vintage Books, New York, 1994.
- Dian Ravitch, “Multiculturalism: E Pluribus Plures” *The American Scholar* (Summer 1990)
- Edward W. Said, *Culture and Imperialism* New York: Alfred A. Knopf, 1993.
 エドワード・W. サイド 『文化と帝国主義 I』（みすず書房, 1996）
- 遠藤泰生 「多文化主義とアメリカの過去——歴史の破壊と創造——」 油井大三郎, 遠藤泰生編 『文化主義のアメリカ——ゆるるナショナル・アイデンティティ——』（東京大学出版会, 1999）
- Fredrick Jameson, *The Ideologies of Theory: Essays 1971-1986* Vol. 2 Minneapolis: University of Minnesota Press 1988. フレドリック・ジェイムソン 『後に生まれる者へ：ポストモダニズム批判への途——1971-86』（紀伊国屋書店, 1993）
- フランツ・ファノン 『地に呪われた者』（みすず書房, 1979）
- 古矢旬 『アメリカニズム：「普遍国家」のナショナリズム』（東京大学出版会, 2002）
- Giovanni Arrighi, Terence K. Hopkins & Immanuel Wallerstein, *Antisystemic Movements* Verso, London, New York 1989.
 G.アリギ／T.K. ホプキンス／I.ウォーラースティン 『反システム運動』（大村書店, 1993）
- Hector St. John de Crevecoeur, *Letters from an American Farmer* Everyman's Library 1951. J.ヘクトール・ジョン・ド・クレヴクール 『あるアメリカの農夫の手紙』（研究社, 1982）
- Henry Louis Gates, Jr., *Loose Canons: Notes on the Culture Wars* Oxford University Press, 1991.
- 樋口映美 『「文化戦争」の概念と理念』 トッド・ギトリン 『アメリカの文化戦争——たそがれ行く共通の夢——』（彩流社, 2001）
- Homi K. Bhabha, *The Location of Culture* Routledge, London and New York. 1994.
 ホミ・K. バーバ 『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』（法政大学出版会, 2005）
- Horace M. Kallen, “Democracy Versus the Melting-Pot: A Study of American Nationality” *The Nation* Feb. 8, (190-194) & Feb. 25, (217-220) (1915)
- Howard Fineman, “Affirmative Action: Race and Rage” *Newsweek* (April 3, 1995)
- Immanuel Wallerstein, *Geopolitics and Geoculture : Essays on the Changing World-System* Cambridge University Press, 1991.
 I. ウォーラースティン 『ポスト・アメリカ——世界システムにおける地政学と地政文化——』（藤原書店, 1991）

- James Davidson Hunter, *Culture Wars: The Struggle to Define America* Basic Books, 1991.
- 河野健二 「1848年と資本主義の発展」 『思想』 (No.645, 1978年第3号)
- リュック・フェリー／アラン・ルノー 『68の思想——現代の反一人間主義への批判』（法政大学出版局, 1998）
- Linus A. Hoskins, “Eurocentrism VS. Afrocentrism: A Geopolitical Linkage Analysis” *Journal of Black Studies* Vol.23, No.2. (December 1992)
- Michael Walzer, *What It Means to Be an American : Essays on the American Experience* Marsillio Publishers Corp, New York 1996. M.ウォルツァー 『アメリカ人であるとはどういうことか：歴史的省察の試み』（ミネルヴァ書房, 2006）
- Molefi Kete Asante, “Multiculturalism: An Exchange” *American Scholar* (60, 1991)
- Ralph H. Orth & Alfred R. Ferguson, *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson* Vol. IX 1843-1847 The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1971. pp. 299-230.
- Randolph Bourne, “Trans-National America” David A. Hollinger & Charles Capper ed., *The American Intellectual Tradition* Fourth Edition, New York, Oxford, Oxford University Press, 2001.
- Richard Karlenberg, “Class, not Race: An Affirmative Action That Works” *The New Republic* (April 3, 1995)
- R.W.B. Lewis, *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century* The University of Chicago Press, Chicago and London, 1955.
 R.W.B. ルーイス 『アメリカのアダム——19世紀における無垢と悲劇と伝統——』（研究社, 1973）
- Sidney Kaplan, “Herman Melville and the American National Sin” *Journal of Negro History* Vol.41, (1956) Vol.42, (1957)
Time July 8, 1991, November 18, 1993 (A Special Issue).
- Todd Gitlin, *Why America Is Wracked by Culture Wars: The Twilight of Common Dreams* Metropolitan Books, Henry Holt and Company. New York, 1995.
 トッド・ギトリン 『アメリカの文化戦争——たそがれ行く共通の夢——』（彩流社, 2001）
- 安河内英光, 馬場弘利編 『60年代アメリカ小説論』（開文社, 2001）
- W.E.Burghardt Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches* London Archibald Constable & Co., Ltd., 1905.
 W.E.B.デュボイス 『黒人のたましい』（岩波文庫, 1992）